

子どもたちの生活の場を意識した
「教育環境整備」
～個人の実践レポートから広がり求めて～

上川管内公立小中学校事務職員協議会
名寄ブロック

1 管内及びブロックの概要

上川管内公立小中学校事務職員協議会（以下、上事協）は、上川管内を名寄、士別、中央、富良野の4つのブロックに分け、研修をすすめています。名寄ブロックは、名寄市以北の1市3町1村で構成され、中川町（2人）、音威子府村（1人）、美深町（3人）、名寄市（13人）、下川町（1人）の合計20名で活動をすすめています。

2 研究の経過

名寄ブロックでは第63回全道事務研でそれまでの過去3年間の研修の歩みを報告しました。内容としては上事協から提起される研究課題を十分に進めているとはいえないが、名寄市を除く他町村では2人配置のところが多く機動力という面での強みを町村での活動に生かしている部分もあることから、今後はそれらを生かしてブロック研修の活性化につなげたいというものでした。

ここ数年、新採用者や期限付き採用者等が全構成員の50%を占めています。加えて他管内から転入してきたばかりの会員も多く、前回の全道事務研で発表したように現在でも上事協から提起されるテーマに沿った研修がより深く掘り下げて取り組んでいるとはいえません。

ブロック研修会は年5回ほど開催していません。研修会の充実をはかるため、一人1レポート、全員の発表を目指し研修会ごとに発表者を割り振っています。そこで持ち寄ったレポートをもとに交流をすすめるスタイルがここ数年定着してきました。しかし、前述の通り新採用者・期限付き採用者・他管からの転入者が多数いるため、レポートの内容は実務・事例交流に片寄りがちでした。私たちにとってこれらの交流は自分のスキルを高めるために重要なことですが、「教育環境整備」を

意識した実践とレポートづくりも加えて、私たちの考える学校事務の目的である学校づくりに近づくことと、さらなるブロック研修の活性化につなげたいという願いをもって地道にコツコツとすすめてきました。以下、年度を追って具体的なとりくみを紹介します。

3 各年度の研修について

（1）2013年度

2013年度の研修の内容は「創造性あふれる学校事務実践と交流」をテーマとして5回の研修会を開きました。各個人最低1本はレポートを作成して発表するという方法を取り、上事協の提起である学校間連携、教育環境整備といった研究課題はありましたが、特別な事例や希少事例の実務に関するレポート発表と交流を中心に研修を深めました。

ブロック構成員は、若年層や期限付事務職員が多いことから、ブロック研で発表される多岐にわたる内容のレポートは、実務面で有意義であり、交流においても上事協の研究課題にふれる場面もあり、一人一人が日々の実践につなげていけるものだったと思います。

個人レポートのほかに、2013年度は上事協研修部の提案である教育環境整備にかかわって、各学校からトイレ等の整備状況のアンケートを取り、その結果を全体で検討し、今後の各校共通した課題にできればと計画を立てました。集約結果については、とりくみが遅くなってしまい、全体で検討するところまでいけなかったのが残念でした。

（2）2014年度

2014年度はテーマを昨年度同様「創造性あふれる学校事務実践と交流」、サブテーマに～子どもたちの生活の場を意識した「教育環境整備」を考える～としました。

昨年同様の実務研修を主とし、発表と交流を行いました。併せて上事協の研究テーマである『子どもたちの生活の場を意識した「教育環境整備」～学校間連携を通した学校づくり～』を意識した教育環境整備のレポート発表についても積極的に行うことを確認しました。

レポートの内容は実務実践や事例をはじ

め、校内安全点検や教室の暑さ対策などの教育環境整備を念頭に置いたレポートもありました。

教育環境整備を念頭に置いたレポートでは、前述の他に特別支援学級増設に関わる整備や熱中症対策、学校図書館の整備や備品の整備等が発表されましたが、いずれもちょっとした会話がきっかけで始まった実践です。

発表レポート 「安全点検について」

A小学校

学校の敷地内には、運動場をはじめとして多種多様な遊具があり、老朽化による事故の報道も増えてきていることから、当該校では月例安全点検の実施内容を屋内のみから屋外（遊具等）を含めた点検に変更することを職員会議で提案したという実践です。意見交流では前任校や他校の状況と現任校を比較し、安全点検表や措置報告書、安全点検実施要領など実際に使用している様式などを基に交流しました。学校によっては管理職主体の所もありますが、この学校では事務管理部の分掌業務として、子どもたちの安全確保、施設設備の充実を目的として行われています。翌年には、グラウンド開きの前に遊具の点検も実施することになりました。

発表レポート 「生徒の生活の場を意識した『教育環境整備』」

B中学校・C小学校（実践レポート集1～3ページ）

夏場に窓を開けると網戸がないためにスズメバチが侵入し、その対応は管理職と職員が担っています。網戸の設置を教育委員会へ要望をしても予算の関係上すぐには設置できないので学校で資材を購入し、自作で簡易網戸を作成し対応しました。その結果、夏場の暑い時期でも安心して窓を開けられるようになりました。網戸が設置されていない学校では、この実践を基に簡易網戸の設置や新規に扇風機の購入を検討したところもあります。この網戸の設置については、第2弾、第3弾と改良を重ね、2015年には簡易網戸が設置できなかったアルミ枠にも木材を使用して設置できるようにし、さらにマジックテープを利用す

る事によって窓の開閉もスムーズにできるように工夫されました。2016年には体育館や格技室など部活動で使用する顧問をはじめ夜間開放利用者（地域一般）にも好評を得ました。

このように教職員の声や子どもたちの声から、自分たちにできることを模索し、自校職員をはじめ教育委員会や他校と連携し教育環境整備の実践ができるきっかけになる年となりました。

（3）2015年度

2015年度の名寄ブロックは、他管内からの異動・新採用者・期限付きの方が多く配置されました。そのため、今までよりもより丁寧な研修が必要であると考え、上事協研修部で進めている研修内容を振り返りながら、従来からいる会員とともに研修を深めることにしました。また、継続している一人一人が実践レポートを発表することは、継続してとりくむことにしました。このレポートは、会員それぞれが主体的に研修会に参加するために、名寄ブロックで継続している活動です。2015年度については、「人とのかかわり」を意識してレポートを作成することを確認しました。また、初めて土別ブロックとの合同一日研修会を行いました。名寄ブロック・土別ブロックで進めている研修内容についての交流、そして、上事協研修理事に参加してもらい、上事協で進めている研修についての説明やレポート交流などが行われました。事後に集約した、両ブロック会員のアンケートからも、有意義な時間を過ごせたことがわかりました。

発表レポート「学校の財政財務を考える」 ～保護者負担軽減のとりくみ～

D小学校（実践レポート集4～6ページ）

学年費を担当する教員に働きかけ、少しでも保護者から徴収する学年費を減らすとりくみです。就学援助費の学用品費の上限金額を提示し理解を求める方法は、有効であるとの意見が出されました。また、市町村経理から各学年に配分した予算は執行時期に学年差がでてしまうので、年度当初から金額を提示し、市町村配分予算の配当金額を前提に、保護者から集金する学年費を考えてもらうとりくみ

は参考になりました。学年費については、私たち事務職員が直接の担当でないとしても、目を光らせる必要があるとの意見もでました。具体的に保護者負担軽減をはかるには、学校の規模などによりできることが違いますが、私たちは試行錯誤を繰り返しながら、とりくみを継続していく必要があります。

発表レポート「学校祭での体育館入口暗幕の設置」

E 中学校（実践レポート集 7～8 ページ）

学校祭を控え体育館の入り口に暗幕をつけて欲しいという要望に応えるため、どのように取り組んだらいいのかを研修会で問いかけることにより、そこで得たヒントや情報をもとに解決したという実践です。自校内だけで解決を図ろうとすれば、配当予算からの購入や教育委員会への設備要望で上げる手立てが考えられますが、費用面の問題と解決するまでに時間のかかることが予想されました。今回、市内の事務職員研修会で話題にだすことにより解決の糸口を見出し、連携により暗幕を入手して、どのようにすれば効果的に設置できるかなどを他職種と連携して取り組んだ結果、費用を抑えつつ遮音・遮光効果のあるものを取りつけることができ、保護者アンケートにそのことが記載されたように来校者にも好評だったことが伺える実践となりました。

（４）2016 年度

2016 年度の研修は、昨年から継続して取り組んでいる教育環境整備にかかわる「ひと」とのかかわりを意識した個人レポート作成と発表及び交流を行いました。

発表レポート「児童との清掃活動をとおして～生活の場としての学校を考える～

F 小学校（実践レポート集 9～10 ページ）

児童と一緒に清掃活動を通して、清掃の方法や、より良い簡単できれいに清掃ができる清掃用具や清掃方法についてレポート発表と交流を行いました。論議の中では、小学校低学年児童には「ほうき」を使って清掃することが難しいという意見や、モップの交換を数

カ月も行わず使用することは、環境美化としての意味があるのだろうか？でも現実にモップを頻繁に洗濯する予算の確保は厳しいという意見や、フローリングの校舎では水拭き自体を行っていないなどの意見が出されました。学校で児童生徒が使いやすくきれいに清掃できる清掃用具についても交流しました。

発表者からは、「清掃活動に限らず、児童生徒との交流を持つことは、子ども目線でしか気が付かない新たな発見や業務改善の視点が明らかになるので積極的にかかわってみてはどうでしょう！」との意見がだされました。

清掃用具更新に限らず、備品や用品購入にあたっては、担当者や関わる職員と打ち合わせを重ね、職員会議で意見交換をしながら必要理由や使用頻度などの説明を加え決定することが大切だとおさえることができました。

発表レポート P F シートを活用した「保護者負担軽減について」

G 中学校（実践レポート集 11 ページ）

レポートの内容は、第 66 回全道事務研で発表された P F シートを活用し、私費負担金の削減に向けたレポート発表です。実践を通して、私費と公費の割合を把握することができたこと、P F シートでは記載されていない項目の私費負担額が予想外に多いこと、入学時の新入学用品費の金額が多いことが実態として把握できました。名寄市内の 3 校の中学校では、他校の P F シートを自校に持ち帰り、比較することにより実態や状況を把握し、各校で担当者と私費負担額について協議を行うなど学校間での取り組みにつながりました。私費負担削減に向けては、学校保管可能で使い回しのできる備品（ゼッケン）の備品要望、校内再配分による各教科の一部公費化（画用紙）、Q-U 診断の公費予算化に向けた予算要望を行ったことの実践報告がありました。

論議の中では、経験年数にかかわらずシートに数字を打ち込むだけで客観的で説得力のあるデータを得られ、他職種にアプローチしやすいとの意見が出されました。名寄ブロックでは、すでに、複数校が P F シートを活用し発表者と同様の実践を行い、他校と徴収金の把握や交流を行い、そのデータを活用し予

算要望に活用したとの報告もありました。

教育予算の増額が厳しい現状において、一度公費負担とした教材等を予算減額になったからという理由で、再び私費負担となることがないよう継続的に確保していくことが必要なこと、教材教具の選定を行っている教員に対しては保護者負担軽減について理解と協力を求め、事務職員としては、校内再配分の検討や予算執行の見直しを行い、それでも配当予算が不足する場合は教育委員会に対して説得力のある算要望を行い配当予算の増額や備品納入につなげていく働きの必要性を確認できました。

発表レポート 「H小学校の教育環境整備」
H小学校(実践レポート集12～17ページ)

2016年度新採用事務職員の自校における環境整備のレポートです。

学校の教育活動の把握のため他職種や児童との「ひととのつながり」を大切に、授業参観や少年団活動の様子を通し学校で必要な教材教具を知り、教育環境の整備や環境の美化を行いました。実践をとおし、他職種と意見交流を行い不要な備品は廃棄を行い、必要な備品は、配当予算での購入や次年度以降の算要望に反映するなど教育環境の整備につながりました。また、自校で使用していないアコーディオンについては、遊休備品の有効活用の観点から市内の学校に備品を譲渡するなど活動に広がりを見せました。

また、「児童アンケート」の実施にかかわっては、3～6年生を対象に児童アンケートを行いました。実践のきっかけは、今年度10月の土別ブロックとの合同ブロック研で発表されたものを参考に次年度算要望に活かすために実施しました。児童の目線ならではの意見が出され、その意見を算要望に反映しました。

児童から、出てきた意見については、児童向け事務日より「智恵袋」を通して校舎の営繕や教材等の購入の有無を児童に知らせました。

児童向け事務日より、直接学校や学習に関係のない事例も掲載していますが、児童にも好評で、今後とも情報発信のツールとして

大いに活用できそうです。

4 まとめ

成果として

手探りで始めた「教育環境整備～ひと的整備を意識して～」実践レポートの交流でしたが回を重ねるごとに発表レポートの本数が増え内容も充実してきました。レポート作成を取り組みやすくするために他ブロック（中央ブロック）の実践報告の様式を取り入れ、研修会に理事を招き上事協の研修テーマについて具体的実践を交えながら説明を受けました。これらのことで実践とレポート作成へのハードルが下げられ主体的に研修会に参加できる環境になったと考えられます。振り返ってみるとまず、研修会で会うことから始めようという「ひと」との結びつきや、「ひと」との出会いを意識した研修会を開催し、2013年度には5本程度だった教育環境整備の実践レポートも年度を重ねるごとに増えてきて2016年度には20本を数えるほどになりました。一つ目の成果としてあげられると思います。

また、レポートの交流から他校の実践を自らの学校の実態に照らし合わせることで新たな課題の発見につながり広がりを見せた実践もありました。二つ目の成果として、実践をレポートにまとめることで「教育環境整備」の取り組みを見える化（視覚化）することができたことがあげられます。レポートを通して事務職員仲間へ、実践の広がりや自校の児童生徒や教職員へ、さらに地域・保護者や地教委へと自分を取り巻く人の意識の変化にもつながってきていると思います。

今後に向けて

上川では「教育環境整備」を“教育算要望と執行における諸活動”と言葉の整理をしています。現在のところ名寄ブロックでの教育環境整備の実践とレポートの交流は主に執行における諸活動の段階といえます。また、「ひと的整備」を意識した実践を通し学校間で連携し実践するところまでは至っていませんがブロックとして大事にしてきたことは参加すること集まることです。そこで、どんな

話題でも交流することで人との関連性が生まれてきます。とりくみ自体はどれも一人でできるものではないと考えればどの実践も「ひととのかかわり」を意識した教育環境整備であると考えられます。

個人の教育環境整備のとりくみが教育予算の充実へとつながっていくためにはやはり連携したとりくみが必要となってくるでしょう。いかに連携したとりくみへと発展させていくのが課題といえますし今後に向けた動きになっていくと思われま

す。この4年間で思った以上の実践の蓄積が出来ました。新採用や期限付き採用者も多くの実践にチャレンジし、経験年数の長い事務職員にも大いに刺激を与えてくれています。

今後は更なる実践の蓄積を目指し、仲間を広げ、連携した取り組みにより教育予算の充実につながる活動をしていきたいと考えています。